

誌 上 討 論

薄葉豊「おやじたちは今—『おやじの会』に見る男縁の再構築」(『東北人類学論壇』5号、52-69ページ)へのコメント

上野 千鶴子

おもしろいのでつつい拝読。

上野への批判というより、変貌、ですね。20年たつと、こういう世の中になってきたのですねえ。

とはいえ、疑り深い社会学者は、以下のような疑問がむらむらと湧いてきます。

- 1) 「おやじの会」の先行例(80-90年代)には、「雷おやじの会」のように父権復活派もあり、これらにふれないのは一面的。(男性解放運動の中には、男権回復派がいるのは常識のうち。)
- 2) 面接の引用だけでなく、集会の頻度、曜日、時間帯、場所、人数、参加者構成(家族も参加しているのか)、会費、酒代の負担、酒量、酒の種類、酔いの程度(許容範囲も)、あとかたづけ等々の観察データが必要。
- 3) ルールの「一品持ち寄り」はほんとに「おやじの手料理」か?(かあちゃんを動員していないか?)
- 4) 男女共学縁(女縁が混性縁)になるときの参加のしかたはカップル単位か、カップル分離型か? 上野論文に予測があるから、論点とすべき。「せつかくかあちゃんから離れてきてるのに」がキーワード。そしてそこでの「男女交際」の慣行やルールはどうか?
- 5) かつて会社人間だった彼らが、どうしてこの年齢になって、集まる時間的余裕ができ

たのか？窓際族になったからか（40代で社内競争は終わっている）、それとも自発的に余裕を選んだか（受動窓際族／能動窓際族？プチ隠居？）時間資源を、いかに、なぜ、捻出しているのか、について（個別でインタビューしたなら）つつこんだ聞き取りをすべき。

6) 家族との関係。捻出した時間資源を家族のためではなく、男縁のために消費することに対する家族の怨嗟があるはず。または家族の評価があればそれも取材すべき。質問項目に、「ご家族の反応はどうですか」を入れればすむ。これが女縁なら、なくてはならない質問。

というわけで、人類学というディシプリンに対するわたしの偏見を丸出しにすれば、おもしろいが、下手な人類学的調査の見本。つまり、研究者がインフォーマントの代弁者になってしまっているために、つつこみが甘い。

以上、コメントです。

上野コメントへの応答

薄葉 豊

「東北人類学論壇第5号」に寄稿した「おやじたちは今－『おやじの会』に見る男縁の再構築」について、上野氏からコメントをいただいた。これに対する回答を以下に述べさせていただきます。

1. 「おやじの会」の多様性について

第1点の父権復活派の問題について、確かに私の記述には一面的な部分があったと思う。私が収集した資料の中にも、父権主義的な要素を持つおやじの会があった。中には、他人の子供を叱る「雷おやじ」への回顧や憧憬が立ち上げの要因になっていた会もあったように思われる。特に、おやじの会の全国組織たる「おやじ日本」はその象徴であるように思われる。何せホームページを開くと「おやじたちよ、立ち上がれ」で始まってしまおうの

だから、父権復古主義甚だしく、かような特徴を有する会の集合・集積とすら言われても仕方あるまい。

また、私がフィールドワークを行なったSおやじの会においても、父性を意識しているような発言が見られた。例えば、例会の中で社会事情について話題になることがしばしばあり、昨今の教育問題について、「昔は何でも学校の責任にするような風潮はなかった。子供が『学校で先生にひっぱたかれた』って言って帰ってきたら、『ひっぱたかれたのはお前が悪いからだ』って言って今度は親父にひっぱたかれたもんだ。ましてそれが体罰になるなんて騒がれることもなかった」と語ったメンバーがおり、みなこれに同調していた。その後、父親の教育への関与の重要性についても触れていた。

このように、会の活動として実践するか否かは別としても、おやじの会には少なからず父権復活への思いを抱いている部分がある。

しかし、それでも私が父権復活派について触れなかったのは、本論中で触れる必要がなかったためである。

拙稿で主張したかったことは、おやじの会には戦後社会の構造の変化（大衆化・郊外化→職住分離・核家族化）によって失われたものを取り戻そうという目的が基本にあって、その結果脱カイシャ人間、子供との触れ合い、地域とのかかわり重視という活動が生まれてきている現実、つまり、一度地域を離れ企業という組織に入り浸りになってしまった男たちが、再び地域社会に帰り始めているという点を主張したかったのである。

ただ、そうであっても、おやじの会には「父権復活主義的な要素も見られる」という点を、議論材料の1つとして述べるべきだったことは反省したい。

2. 例会について

第2点の観察データについては、拙稿（薄葉 2006a:60-61）でも若干記述しているが、より詳しい卒業論文（薄葉 2006b）の記述を加味して、補足説明したい。

- ・集会の頻度は月1度、第4土曜日、18時から。場所については漠然と「町内の公共施設」と記したが、さらに詳しく述べるならば以下のとおりである。立ち上げ当初は町内に5つある集会所を持ち回りで利用していたが、面倒を嫌うおやじたちの気質からか、西地区のコミュニティーセンターに固定することとなった。しかし今度は東地区のおやじから不満をくらい、コミュニティーセンターから東地区の「老人憩いの家」へ移動した。すると当然の如く西地区のおやじたちの参加率が低下し、結局当初の集会所持ち回りに落ち着

いた。やや計画性のないおやじたちの一面である。

- ・人数はまちまちである。S ニュータウンは1-5丁目に区分けされており、集会所は各丁に存在する。上記例会場所の変遷から伺えるように、集会所に家が近いメンバーの参加率が高い。中高年期のおやじたちにとって、広い町内を歩きまわるのは苦痛なのである(薄葉 2006b:67)。残念ながら、参加率に関するデータは作成していなかったが、私のフィールドワークからは、立ち上げに関わったA-Eさん等中心メンバーの参加率が極めて高いことがわかる。例えば、Aさんは関東に単身赴任しているが、他のメンバーよりも参加の頻度が高かった。
- ・参加者構成であるが、家族が参加することはほとんどない。ただ、年末(クリスマスイブ前後)に行われる「家族対抗ボーリング大会」は別で、この時はメンバーの妻や子供も参加する。本大会は一応「家族対抗」と銘打っているが、全てのメンバーの家族が参加するわけではない。一応、家族と他のおやじとの交流を目的としているのだが、一部のメンバーの妻や子供しか参加せず、結果いつもどおりのおやじどうしの交流になってしまっている。どちらかといえば「ボーリング世代」であるおやじたちの交流の場であると言える。
- ・会費はない。例会の際の酒や食料は自己負担であり、各自財布(小遣い)と相談しながら地元スーパーにて酒を調達してくる。会の予算や会計はないので、祭りの出店をだす際は、町内会から前借して売り上げの中から返済する。
- ・酒量と酒の種類。これもまちまち。おおよそ500ml 缶ビール1ケース/1人+ α (日本酒、焼酎、泡盛、マッコリ、どぶろく、自製酒等)程度である。酒を飲まないメンバーはポカリスエット、DAKARA、野菜生活等のソフトドリンク(1リットル)2~3本程度。
- ・酔いの程度。せいぜい2時間程度の例会なので、悪酔いは無い。しかし、年に一度は集会所でつぶれる者あり。通常9時までの例会が、12時まで延長するときである。
- ・後片付け。メンバー全員が各自使用したグラスや食器を片づける。当然準備も到着したメンバーから随時行なう。市民センター祭りで出店をだす際は同センターの調理室を用いるが、片付けは流し台の掃除や床のモップがけにまで至る。年を追う毎に丁寧さが増しているように感じられるが、これは過去にセンターや集会所から「おやじの会の後は汚い」という苦情が出たためである。面倒が嫌いなおやじたちであるが、反省は活かす。

3. 例会の料理について

第3点の「一品持ち寄り」についてだが、おやじたちが例会に持ち寄る料理は、前述のように、そのほとんどが地元スーパーから調達されている。しかし、中には手作りの料理をタッパーに入れて持ってくる者もいる。この手料理は、確かに、ほとんどが妻の手料理であるが、結局は夕食等の「余り物」である（漬物、煮物 etc）。例会のために奥さんが本格的に料理を作り出すという例は聞いていない。したがって、「動員している」とまでは言えないように思われる。月に一度の例会に参加する代償に、おやじたちはスーパーの惣菜や余り物で夕食を済ませているのである。例会への参加は家族の理解のうえに成り立つものであると同時に、基本的に家族の支援は得ていないのが通常である。

4. おやじたちが女性といるとき

私の印象では、S おやじの会メンバーが主婦たちといる際に、特別な「男女交際」の慣行やルールは存在しない。しかし、私が気づかなかっただけかもしれない、この点については確信が持てないので、現状ではお答えできない。将来の課題としたい。

5. おやじたちの時間の作り方について

第5点のおやじたちの時間的余裕の問題については、この年齢になり、会社内の地位も上昇したからこそ、時間的余裕ができたと見る。会の中心メンバーはほとんど管理職級である（鉄工会社の社長、建設会社部長等）。馬車馬のように働かされたヒラ社員時代とは余裕が違って当然である（ヒラの頃は2日寝ずの出張で、帰りの高速道路運転中に気づいたら眠っていたというおやじもいた。まさに死ぬ思いで働いていたわけである）。

ただ、中には私のフィールドワーク中に職を失った者がいた。ここでその経緯を詳細に述べることはできないが、退職前に彼が社内で窓際族として扱われていた部分はあった。その後彼は再就職したが、その前後においても彼のSおやじの会での活動はかなり積極的なものであった。

いずれにしろ、メンバーの勤務態度と彼らがおやじの会へ参加するための時間資源に直接的な関係があるとは言い難い。拙稿でも述べたが、おやじの会への参加は個々の自由である。だからこそ、仕事が忙しいときは来ない、早くあがれたら行く、という習慣ができあがっている気楽な会なのである。彼らが来たり来なかったり、定刻どおりに集まらないのもそのためである（例会に1時間半遅れてきた理由が『2回風呂に入っていた』で済ま

されるのもそのため)。つまり、おやじの会はわざわざ時間を捻出して行く場ではなく、むしろ「暇なら」行く場なのである。

したがって、決して仕事のない中年男性の集いではなく、社内の厄介者→いつも定時あがり→おやじの会という構図は成り立たない。あくまでも個人的な意見であるが、仕事ができる人間はプライベート時間もうまく作れるのではないだろうか。

ただし、つっこんだ質問ができなかったこと、そしてそのために深い分析に欠けた点は反省したい。

6. 家族の反応

第6点の家族との関係については、家族へのインタビューを行なわなかったこと、その結果メンバーに対する家族の反応を調査できなかったことは、反省すべき点だと思う。

ただ、家族がSおやじの会の活動に参加する例はあった。例えば拙稿に登場したAさんの娘さんは、頻繁にSおやじの会に参加していた。彼女は、主婦サークルXの交通安全活動（主に新1年生のための演劇会）に毎年参加している。また、主婦サークルYの雀踊りにも時々参加している。まだ2回しか行なわれていないが、家族対抗ボーリング大会にも必ず参加している。間違いなくAさんが上記諸活動への参加を誘導しているのだが、「だるい」などとふてくされながらも年頃の娘さんが毎回おやじ連中にまじって参加しているところを見ると、Sおやじの会に対して全く理解を示していないというわけではないのだろう。なお、主婦サークルYのバックミュージック隊としてAさんがイベントに参加するときは、奥さんがかなりの頻度で参観に来る。

既述のように、Sおやじの会の活動は、家族の理解のうえに成り立ち、かつ家族の支援は受けないものである。拙稿（薄葉 2006a:66）にもあるように、家族の後押しを得てSおやじの会に入ったメンバーもいる。もし家族から会への参加を拒まれるメンバーがいれば、彼は間違いなくSおやじの会に姿を現さなくなるだろう。Sおやじの会は仕事と違って、家族に飽きられながら行くものではないのだ。

ところで、この上野氏の指摘に関して、私は以下のような仮説を持っている。

既述のとおり、Sおやじの会は40-50代の中年男性の集いである。私が彼らと出会った2003年夏は会結成5年目であったが、その時既に子育てが一段落していたメンバーが多かった（子供の大学進学、就職、結婚、出産等）。しかも彼らの子供のほとんどはSタウンを離れており、家には妻と2人だけとか、家を継いだ息子がいるといった例が多かった。つ

まり、子育てが一段落ついたところで、夫婦が何か新しい生活を模索し始める時期にいたのではないかと思う。

例えばBさんへのインタビューの際、同席していた妻は、Sおやじの会結成の前に、既にSタウン内の主婦サークル（料理教室、旅行サークル等）に参加していたという。その頃は彼の子供もまだ中高生であったが、Sおやじの会結成期前後に子供が関東の学校に進学したといった事情があった。子供が家を離れ、妻が町内のサークル活動に楽しんでいる一方で、「自分も何かを始めたい」という思いが芽生え始めたということは考えられないだろうか。その思いが、Sおやじの会立ち上げの一要因になっていたとも考えられる。もしこの仮定が成り立つとすれば、妻が夫の会への参加を憂える理由はないであろう。

7. 反省と感想

上野氏の指摘にあるように、およそ2年半にわたるおやじの会でのフィールドワークは、主観的かつ一面的な部分が強かったように思われる。その原因としては、(1)インフォーマントとの距離の測り方が不十分だったこと、(2)そのために、一步つっこんだ質問ができなかったこと、が挙げられる。

インフォーマントはみな40-50代で、私の父親と同じ年代であるということもあり、どこまで近づきどこまで離ればよいか、イマイチつかめなかった。彼らから見れば、私はフィールドワーカーというより「おやじ見習い」的な部分もあった。結果として、私がフィールドに馴染みすぎ、彼らの言うことをほとんど鵜呑みにしていた観は否めない。

フィールドにて参与観察を行なったのが学生時代であったため、社会に出て数十年経つ彼らの身になって話を聞いたり活動を観察することは、当然ながらできていなかった。したがって彼らの話を「はあそうですか」と鵜呑みにするしかなかった部分がある。

それでも、私なりに感じた問題もあった。Sおやじの会は気の合う男どうしの集まりであるがゆえに、メンバーがだいぶ固定化されてしまっていること。そのために、外部からするとやや閉塞的なイメージを持たれやすいこと。例えば、若い男性（特に幼児を持つ30代の男性）から会の活動趣旨について理解を得られない、新規メンバーが活動に参加しにくい等。そのほか、Sおやじの会が40-50代のメンバーで固定されており、新規メンバーがいなかったためそのままの年代でシフトアップしていくことから、体力的に祭りなどの地域活動への協力規模を縮小せざるをえない等である。

しかし今、就職して社会に出て、彼らの地域社会での高い積極性がわずかばかりだが感

じ取られるようになった。家庭を持たない私にはまだわからない部分も多々あるが、日中働いていながらも、中年男性が集まって土日を返上して地域活動に参加する、ときには太鼓の練習で毎週末潰してしまうというのは、世の中広しといえど「かなりの好き者」と言っているのではないだろうか。このような活動は、少なくとも今現在の私にはできないし、やろうとも思わない。

しかしながら重ねて強調させていただくと、彼らはそれだけ何かを求めているのである。それを探していく過程で地域の男たちと交われるのが、彼らにとって大きな楽しみなのであろう。そして楽しみながらやっていることが、結果的に見れば地域社会の危機管理であったり、全体的に見れば男たちのアイデンティティの変化だったりするのである。

かような活動を今はやろうと思わない私でも、ひとつ理解できることがある。それは酒を飲むことだ。仕事に追われる日々がケなら、酒の席はハレだ。毎週末行なわれる友人との酒宴を楽しみに日々の仕事をこなしている私であるが、同じようにおやじたちも月に一度の例会を楽しみに毎日がんばっているのだと思う。

最後に、つたない論文にコメントを賜った上野千鶴子氏に、感謝の意を表したい。この叱咤を励みに、今後も何らかの形で人類学の世界に係わっていければと思っている。

引用文献

薄葉 豊

2006a 「おやじたちは今—『おやじの会』に見る男縁の再構築」『東北人類学論壇』5号:52-69。

2006b 『おやじたちは今—ニュータウンにおける男縁の再構築—』2005年度東北大学文学部人文社会学科文化人類学専修卒業論文。